〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （国　語）

東京都北区立稲田小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	・誰にでも読めるという視点での正しいひらがな、かたかなの書き方指導に課題。 ・文章を書くときのルール（句読点や助詞の使い方）指導に課題。 ・文章の意味を捉えながら読む音読指導に課題。 ・場に応じた話し方や相手を意識したコミュニケーションの実技指導の不足に課題。	・文字が定着していない児童に対して、ひらがな表・カタカナ表を手元に置かせる。 ・ノートやワークシートを用いて、長文ではなく、短文を書く指導を繰り返し実施する。 ・授業の導入部で必ず音読指導を実施。教科書だけではなく、詩集も活用する。 ・担任と練習、ペアで練習、グループで練習など、スモールステップで場に応じた話し方を指導するとともに、支援が必要な児童には、話の型を示す。	・支援が必要な児童は、字や文を書く前に、きたコンの音声入力などを活用して文章指導をする。 ・クラスタイムや、他の授業においてもノートやワークシートを活用して書く作業を取り入れる。助詞や句読点の使い方などをその場で指導する。 ・様々な音読方法を実践し、物語の内容に沿った表現の仕方を考えさせ、内容の読み取りにつなげる。 ・ペアや小グループ、全体の発表の活動を取り入れ、相手意識をもって発表の活動をさせる。
2年	・漢字学習が、覚えるための学習でなく、作業になっている児童もいる。また、既習の漢字を日常の日記や作文で活用できていない。 ・登場人物の気持ちを表す表現や語彙をより丁寧に扱う必要がある。	・漢字ショートテストを活用し、定期的に定着度を測る。また、漢字を部分で色分けして示す等様々な覚え方を提案する。日記などでも既習漢字を使うよう指導する。 ・物語文では、言葉の意味を確認したり、登場人物の気持ちを表す表現方法を丁寧に取り上げたりする。	・きたコンを使ったアプリを活用したり、ゲームをしたりして楽しく漢字学習に取り組む時間を作る。 ・図書の時間を活用するなどして、読書の時間を確保する。また、読書が苦手な児童には読み聞かせを行い、語彙を増やす。
3年	「話を聞き取る」項目が区の正答率を下回っていること、「手紙のへんじを書く」の目標値は40%と低いものの正答率が37.9%と非常に低くなっている。要因として考えられるのは①聞き取る必要性を感じていない②実体験として手紙を書いていない、ことが考えられる。①については、双方向性のある学習になっていないこと、②については、生活と結び付けて学習展開できていないことが考えられる。	・グループでの話合い活動や、立場を決めての話合い、またペアでの対話活動など、聞かなければ成立しない学習を多く取り入れ、双方向性のある学習の場をつくっていく。 ・手紙を書くなら〇〇さんへ、成果物を作るなら聞き手を設定するなど、対象となる人物や団体など、学習したことを実際の生活場面に落とし込んで学習できるようにしていく。	・アニマシオン的活動を取り入れながら、視覚も使いながら聞くことができるようにする。 ・手順やゴールをイメージできないことが学習意欲に影響している児童には、きたコンを有効活用し、手順を写真で表したり、完成形を先に指し示したりしながら、活動に取り組むことができるようにする。
4年	・漢字の読み、書きの指導において定着の個人差を埋められていない。 ・説明文の段落構成、内容の読み取りについては指導が通っているが、物語については叙述に即した場面構成や内容の読み取りに対する指導が定着していない。	・漢字練習を計画的に行い、小テストで習熟度をフィードバックさせ、定着が十分でない漢字については、反復練習をさせることで定着を図る。 ・物語文の指導においては、“叙述に即して”ということに重点を置き、想像、空想に流れすぎないようにさせる。	・定着できていない漢字については、反復練習をするようにさせる。 ・隙間時間などに、漢字のパズルやクイズなどを提示して、漢字に興味・漢字をもてるようにする。 ・グループ学習でも、着目した記述を交流させ、どういった叙述に着目すればよいか気付けるようにする。
5年	・漢字の読みは定着しているが、既習の漢字を書くことにおいては定着度が低い。書く活動の中で文章表現の仕方、漢字の使い方の指導に課題がある。 ・物語の中の登場人物の気持ちをとらえることを苦手としている児童も多い。人物の気持ちを言葉で表したり、比喩表現の本来の意味なども細かく確認していく必要がある。	・漢字ミニテストを定期的に行い、定着度を測る。既習漢字が使えよう、辞典を机の脇にかけ、すぐに調べられるようにする。また、自主学習などでも漢字を使うことを指導する。 ・物語の指導では、行間を読んだり、一つ一つの言葉に込められた人物の思いを想像し、共有する時間をもつ。	・漢字の形をただ覚えるのではなく、漢字に込められた意味や、成り立ちなど漢字のおもしろさを学習し、身近に感じさせる。 ・漢字ミニテストで6割とれなかった児童には再試験を行う。 ・図書館を積極的に利用し、ブックトークを行ったり、同じ本をみんなで読んで感想を話合ったりする時間をつくる。
6年	・文脈に沿った適切な漢字を使ったり、正しく漢字を書く機会を保障すること。 ・対義語や類義語に関する指導が少ないことから、語彙を増やす活動を充実させること。	・どの教科でも既習の漢字を使って書くよう指導する。 ・朝学習や授業前5分程度を活用して、漢字の学習に取り組むようにする。 ・用語の意味等を調べるときは対義語や類義語にも着目させ、例文を国語の学習ノートに記入し蓄積しておく。	・新出漢字の定着を徹底するとともに、漢字を使った活動を取り入れ、新出漢字、既習漢字を身に付ける機会を設ける。 ・話し合う際に分かりやすく説明することを意識することを通して、語彙を増やす機会を保障する。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （社　会）

東京都北区立稲田小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	・体験的な活動が十分にできていない。 ・具体的資料から情報を読み取り、表現する力に課題がある。	・問題解決的な学習を展開し、きたコンを活用し、効果的な資料を提示する。 ・調べる時間を確保し、得られた情報をまとめ、表現する活動を取り入れていく。	・まとめ方について様々な方法を提示し、活用できるようにする。
4年	・学習内容の知識定着にやや偏りがあった。 ・資料の読み取りの指導も行ってきたが、一つの資料からの読み取りが多くなってしまい、複数の資料から多面的に読み取る指導が十分でなかったかもしれない。	・導入部分などを基本に、絵図や資料を提示して学習事項に対する興味・関心を高め、主体的に学習に取り組めるようにする。 ・複数の資料から考察させる学習を通して、多面的に情報を読み取り考察できるようにする。	・今まで通り知識の定着にも力を注ぐとともに、グループ学習などで意見を共有する場面を増やし、多様な意見に触れる機会を増やす。 ・学習内容に関連した絵図などの資料を準備し、社会科の学習への興味・関心を高める。
5年	・児童ともに学習問題をつくり、調べ学習を行っており、社会の問題を自分事ととらえ学習を進める児童が多い。 ・資料を読み取り、まとめることに課題があるため、参考資料を精選することが必要。 ・地図帳を使うことが少なく、都道府県の位置関係が定着していない児童が多い。	・人の思い、工夫や努力について考えたり、調べたりできる授業づくりを行う。 ・単元のまとめとして、社会の一員として自分には何ができるかを考えさせ、社会と自分とをつなげて考えられるようにする。 ・普段から都道府県の位置を地図帳で調べ、全体で確かめる時間をとる。	・都道府県の位置は、カルタやゲームなどを取り入れ、楽しく覚えるようにする。
6年	・「調べたい」「知りたい」と思うような資料を提示すること。 ・読み取った資料について交流し、考えを練り直してまとめるさせること。	・効果的な資料を提示することで問題意識をもたせながら、交流をすることで読み取り方を定着させる。 ・社会的事象について見つめる時間を確保する。	・まとめ方についての振り返りや交流をする。 ・単元の終わりに学習したことをまとめ、伝え合う活動を取り入れ、身に付けた知識を自分なりに活用する場面を設定する。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （算　数）

東京都北区立稲田小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	・文章を読んで、立式をすることが難しい児童に対しての指導時間の不足が課題。 ・さまざまな考え方を見つける指導に課題がある。 ・基本的な数の合成・分解を習熟する時間の確保が難しい。	・問題の絵を描いたり、具体物や反具体物を児童自身が活用して、問題の意図を考えさせる時間を十分にとる。 ・例題を教師が説明し、類題を児童が解き、さらに定着問題を解くという流れを実施する。 ・グループ学習や、きたコンを活用して、様々な考えに触れる機会をもうける。 ・習熟の時間を授業に取り入れる。問題数をこなすだけではなく、問題数を選択できるなどじっくり考える児童への配慮も行う。	・計算力をあげるために、たし算・ひき算カードでの練習を行う。 ・百玉そろばんを活用し、数の合成・分解を授業の導入で実施する。 ・問題解決学習の時は、流れを、問題提示→見通しをもつ→自力解決→ペア（対話的活動）→集団解決→まとめ　とする。 ・きたコンのeライブラリ等の個別学習を実施する。
2年	・単純な計算問題を好み、文章問題では、出題された時点で解くことをあきらめてしまう児童がいる。聞かれていることを理解できない児童も多い。	・基礎的な学習が終わった後に、様々な種類の問題を解く時間を設定する。 ・単元別の課題だけでなく、様々な単元で組み合わされた課題に取り組む時間をつくる。	・個別に支援が必要な児童には、安心して取り組めるようこまめに声をかけるようにする。進度の早い児童は、自ら学習を進められるよう、きたコンを活用したり、補充の問題を活用したりする。また、友達に説明する機会を設け、より理解を深められるようにする。
3年	・考えをまとめることを苦手とする児童が多く、自力解決、友達の考え方の推考に時間がかかるので、全体として習熟問題に取り組む時間が少なくなっている。	・既習内容とのつながりを意識させたり、見通しをもたせたり、個別にヒントを与えたりしてから、自力解決の時間をとる。集団解決では学習が深まるように意図的指名を行うようにしたり、友達の意見を説明してみたりして、考えを広げられるようにする。	・より多くの練習問題に取り組ませたり、課題に即した問題を自分で作ったり、児童の実態に合わせた活動に取り組ませる。 ・学習のまとめから次時のめあてや問題を考えさせるなど、児童が主体となって学習を進められるようにする。
4年	・全般的に目標値・区平均より上回っているのは、習熟度別学習をできる限り行ってきた結果だと考える。引き続き継続していく。 ・基本的な考え方や解法はある程度身に付けさせることができたのではないかと思うが、たくさんの情報の中から必要な項目を自ら選び出して答えに至る思考法を身に付けさせることは十分でなかった。	・習熟度別の従来の指導法は、今後ともできる限り続けていく。 ・答えに至るまでの情報を自分で取捨選択できるように、ダミーの数値を入れたり、1つの状況文から複数の問題を出したりして、思考力を付けられるようにしていく。	・つまずきのあった問題については、既習の問題を再提示したり、類似問題を提示したりして補強を図る。 ・理解力の高い児童に対しては、高レベルの問題を提示したり、四則計算を使うパズルを出したりして、知的な満足度を高めていく。
5年	・基本的な計算（特にわり算）が身についていないことや計算が遅いなど、全体的に計算力が低い。 ・授業の中で既習事項を復習しながら単元を進めることが難しかった。 ・習熟度別でクラスを分けられなかったため、授業内での下位層の子の個別指導がなかなかできなかった。	・四則計算の技能的な面の習熟を図る時間を設定する。 ・問題→見通し→自分の考え→みんなの考え→まとめ（振り返り）という授業展開を行っていく。 ・単元のはじめには既習事項の復習をする。 ・2クラスでの習熟度に分けたり、ミニ先生をしてもらったりクラス分けを単元に合わせて変えたりする。	・上位層の子は、結論を言ってから説明するなどわかりやすい説明をさせる。 ・下位層には、具体物を操作させて特徴を捉えられるようにする。また、四則計算の技能的な面の習熟を図る時間を設定する。
6年	・説明したい児童が学習を進めることが多く、全ての児童が主体的に学習を進める時間を保障できていない。 ・2展開での算数授業になっているため、個別指導ができない場面がある。	・集団解決では、自分の考えとの相違点に着目させたり、他の人の意見を説明させたりなど、自分の考えに終始することなく考えを広げながら深められるようにする。	・児童の実態に応じて問題の提示の仕方を工夫する。 ・学習内容を活用して問題作りを行ったり、教え合ったりして、互いにやりとりをしながら学習できる場面を増やす。 ・考えの相違点に着目させたり、他の人の考えを説明したりして考えを広げる機会を増やす。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （理　科）

東京都北区立稲田小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	・継続的な観察活動が必要な単元が続いたため、問題解決学習の流れをしっかりと身に付けるに至らなかった。 ・また、多くの観察活動においても、その目的をしっかりと理解することや、追究したいという意欲を高めてから指導に入ることが不十分であったように感じる。	・問題解決学習の流れを明確にし、ノート作りも含めて繰り返し体験することで、見通しをもって学習に取り組むことができるようにする。 ・1時間の学習の中で予想と考察のどちらに重きを置くのかを考えてから展開を構成する。 ・押さえておきたい理科的な用語を予め整理しておき、学習の中で繰り返し用いる場面を設定することで定着を図る。	・誰かの考えを聞きながら進めた方がよい学習と、何度も操作しながら学習した方がよい学習を精査し実験活動に取り組む人数を決める。 ・動画や写真でも実験の様子を記録しておき、何度も見返しながら結果を振り返ることができるようにする。 ・確証だけを大切にするのではなく、うまくいかなかったときや予想と異なる結果を反証として価値づけていく。
4年	・問題解決型の学習を心掛けていたが、「結論」の部分の押さえが十分ではなかったかもしれない。予想、実験、結果、考察の過程だけでなく、結論の定着を心掛けるようにする。	・問題解決の過程も大切にしながら、結論の振り返りにも力を入れ、定着を図っていく。単元終わりでは、ランダムに指名して単元の振り返りをするなどして、全員が課題意識をもって知識の定着を図れるようにする。	・左欄の振り返りによって、知識の不十分な部分を補充いく。 ・最後の「考察」で出された「新たな疑問」については、演示実験などで疑問を解消して、発展的な興味を満たせるようにしていく。
5年	・メダカや植物などに対する興味はあるものの、自ら問題を見いだし、実験や観察につなげることができなかった。 ・観察や実験結果を共有し、考察するまでに至らなかったため、結果から自分が考えたことや、普段の生活とつなげて考えさせる必要がある。	・児童の興味をそのままに、「どうにかしたい」と思わせる状況や資料を提示してから授業に入るようにする。 ・実験だけ楽しむことがないよう、なんのための実験なのかを理解させてから行うことで考察につなげる。	・予想や考察では、生活経験や、見たことがある現象から考えられた児童に発表を促すことで、普段の生活と理科的現象をつなげて考えることができる児童を増やしていく。
6年	・実際に検証することが難しい単元では、机上の空論になりやすく、知識習得に偏りがちである。 ・毎時間の学習の中で問題意識を高められていないこと、またその問題意識をどうすれば検証し解決していくことが出来るのか、という手法を身に付けられていない。	・身近な物に見立てたり、具体的な生活場面と繋げて考えさせたりして、見方を広げていく。 ・「解決したい」と思える事象提示を行い、問題意識を高めた上で学習に取り組めるようにする。 ・単元導入で出合う事象だけでなく、新たに抱く疑問も大切にし、問題を児童が設定し、解決していけるようにする。	・できる限り少ない人数で実験できるようにする。困難な場合は役割を決めて実験を行い、自分の実験であるという意識を高める。結果を共有・確認してから、考察や結論に進む。 ・今までの結論や生活場面に戻って、問題の予想を考えさせ、考察で比較・検討しながら、単元を通した問題解決ができるようにする。